

# 父親は息子を見つけて

ルカ 15 : 11 - 32



司祭 ヨハネ 井田 泉

2016年3月6日

大齋節第4主日

奈良基督教会にて

いま読まれたのは放蕩息子の話として知られるたとえ話です。主イエスがこの話をされたとき、だれがそれを聞いていたのでしょうか。

ここには心をこめて語っておられるイエスがおられ、それを聞いていた人たちがいるはずです。

だれがこの話を聞いていたか。まず第1に、徴税人や罪人と呼ばれる人たちです。このルカ 15 章の初めにはこう書いてあります。

**「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。」**  
ルカ 15:1

世の中の多くの人たちから疎んじられ、あるいはさげすまれている人びとです。この人たちが真剣にイエスを求めています。弱さや負い目を抱えている人たちです。

**「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。」**  
イエスの話が聞きたいのです。

しかし別の人びとがいます。

**「すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いました。」** 5:2

徴税人や罪人をさげすんでいる、言わば立派な人たちです。ファリサイ派の人々や律法学者たち。彼らは自分たちの正しさに自信を持っています。彼らもイエスに関心がある。しかしイエスが徴税人や罪人を迎えて食事まで一緒にしていることに納得がいかない。イエスが正しい人間であるなら、こういう連中

は遠ざけるべきだと考えています。こんな者たちと自分たちが一緒にされたらたまらない——そう思っている人たちです。

このように、相対立する人たちを前にしてイエスが語られたのが、この放蕩息子の話です。

ある父親のふたりの息子の弟のほうが、父親に要求して、自分が将来もらうはずの財産をもらって金に換えて出て行ってしまいました。やりたい放題遊びたい放題をし尽くして、何もかも使い果たしてしまいました。もう生きて行けない。このままでは死んでしまう。

「そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』」 15:17-19

飢えて弱って、自責の念でいっぱい、遠い道を帰っていきます。衣服は破れ、履き物もなくはだしで、ただただ父親が自分を受け入れてくれることだけを願って、すぎるしかないのです。

「そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」 15:20

父親は来る日も来る日も、息子が帰って来るのを待っていた

のです。毎日毎日、地平線の彼方から息子が現れるのではないかと待っていたのです。

「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて」

父親は見た。彼の息子を見つけた。近づくにつれてだんだんはっきりしてきます。傷んだ服、傷んだ体、痛んだ心。走り寄って倒れかかるようにして息子の首を抱いて接吻しました。

「息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』」 15:21

もうそれ以上言わなくていい。お前の真心はわかった。砕けた悔いた心はわかった。

父親は最高のもてなしをして一緒に喜ぼうとします。

「わたしの息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」 15:24

「この息子」と訳されていますが、原文では「わたしの息子」です。愛するわが子なのです。「いなくなっていた」という訳は弱い気がします。滅びていたのに、失われていたのに見つかった。これほどうれしいことはありません。

イエスの話を聞いていたあの徴税人や罪人たちは、自分とこの息子を重ねて、こんなにまでして迎えてくださる神を喜んだ

に違いありません。失われたわたしたちを愛してくださる神は、このような方なのです。

ところがこの話を聞いて、喜べない人たちがいます。聞いていて不機嫌になっている人たちがいるのをイエスは感じられました。それで次の話をされたのではないのでしょうか。

「ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』」 15:25-27

収まらないのは、帰って来た弟の兄のほうです。

「兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。」  
15:28

兄は父に対して怒っています。あなたは甘い。甘すぎる。

「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」 15:29-30

「あなたのあの息子」と言っています。あれはあなたの息子だろうが、自分はもうあれを自分の弟とは認めない、というこ

とでしょう。

これに対して父親は兄に、「子よ」と呼びかけます。

弟の傷んだ体と痛んだ心を受け入れた父親は、今度は兄のほうの荒れたすさんだ心、別の仕方で傷んだ心を感じています。何とかしたいと願っています。

『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。』 15:31-32

兄は「あなたのあの息子」と呼んで自分の弟とは認めようとしなかったのですが、父はここであらためて「お前のあの弟」と言って、兄弟の愛情を回復することを切望しています。

「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。」

一緒に喜ぼうと父は兄に呼びかけるのです。

兄は正しく立派に生きてきた。怒りは当然かもしれませんが。しかし死んでいたのに生き返った弟のことを喜ぶ人であってほしいのです。

ここまで、この話の父親とは、神さまのことであると思ってきました。しかしそれだけではなく、ふと思うのです。この父親とはイエスさまのことでもあるのではないか。

イエスのもとにはいろんな人が集まっています。あの弟のように、財産とともに人生を台無しにして、回心してただイエスにすがって生きることを願う人。傷んだ人。負い目のある人。

しかしそれだけではありません。正しく生きてきたと思っている人たちもいる。イエスに自分の正しさや熱心を認めてほし

い人たちもいた。その人たちも、癒しを必要とする傷んだ人たちです。

イエスを求めて従おうとする人たちどうしが、お互いに受け入れない、ということがあったにちがいません。

しかしイエスは傷んだ弟を受け入れて癒したいし、兄には心を開いて弟を受け入れてほしい。弟子たちの間に対立と葛藤が収まらないとすれば、その関係の破れを、イエスが引き受けて痛まれる。イエスの体が十字架の上で裂かれたのは、わたしたちの破れの癒しと一致のためです。

今はそれ以上は触れません。

詩編の言葉を聞いて終わります。

**「わたしが小羊のように失われ、迷うとき、  
どうかあなたの僕を探してください。  
あなたの戒めをわたしは決して忘れません。」 119:176**

主イエスさま、失われたあなたの僕であるわたしを探し、見つけてください。わたしたちが悔いてあなたに戻ろうとするとき、わたしたちを引き寄せてください。またわたしたちの心を柔らかくして、自分の正しさのみを主張して人を排斥するのではなく、人を受け入れる愛を抱かせてください。あなたと共にあなたの道を歩ませてください。アーメン